

連載  
講座

なぜ、火事と喧嘩は江戸の華なのか？

歴史家・作家 加来 耕三

江戸中後期の浮世絵師として、一世を風靡した喜多川歌麿を、世に売り出したのは令和七年（2025）度のNHK大河ドラマ『べらぼう〜鳶重栄華乃夢噺』の主人公・鳶屋重三郎であった。

が、二人が出会ったのは天明元年（1781）頃といわれ、「歌麿」と改名したのもそれからのこと。

それ以前は、「北川豊章」と称して役者絵や黄表紙、洒落本などの挿絵を描いていた。

のちの美人画にも多大な影響を与えたといわれる黄表紙とは、「通と滑稽を表裏一体のものとして」表現する洒落本の発想と手法に、さらに挿絵を取り込む手法に基づいた「視覚的文学」であり、わかりやすくいえば、今日の漫画の元のようなものであった。

若き日の歌麿は懸命に絵の腕を磨いていたのだが、彼がちょうど二十歳の時、江戸で経験したのが、明和九年（1772）—文字通り「迷惑（明和九）な」大火であった。

江戸の西南部、目黒行人坂の大円寺から出火した火事は、おりからの南西の強風にあおられて麻布から江戸城東域、さらに日本橋、神田、下谷、浅草、吉原、千住まで延焼して、翌日の正午過ぎによろやく鎮火した。

このおりの火事は、明暦三年（1657）、文化三年（1806）の両大火と並ぶ、「江戸の三大火事」の一つに数えられている。

一説に焼失した大名屋敷は169軒、旗本屋敷は300軒余、寺社院は382カ所、町屋は934町。類焼地域は江戸の3分の1に及んだ。

死者1万4700人、行方不明者4060人余。

あまりの酷さに、元号が「安永」と改められる一因になったともいわれている。

出火原因は、大円寺に盗みに入った願人坊主の真秀による放火とされ、この後、彼は浅草で火刑に処せられた。

ちなみに、この真秀を捕らえたのが、火附盗賊改方（役）を拝命していた長谷川平蔵一。

ただし、この平蔵は池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』の主人公・平蔵宣ではなく、その父の平蔵宣雄であり、将来の江戸町奉行と大いに期待されたが、その後、病没していた。

それはともかく、筆者は以前に明和の大火の火元となった、目黒の大円寺を訪れたことがある。

当時の犠牲者の冥福を祈って作られたという五百羅漢を、このおり拝見したのだが、悲しみの中にもどこか大らかでユーモラスな表情に、大いなる違和感というか、江戸人の意外に楽天的な気風に、ある種の戸惑いを感じた。

今にして思えば、それこそが火事が「江戸の華」となる根源でもあったように思われる。

江戸時代、火事は頻繁に起きているが、どういうわけか江戸は、火事が起こる度に発展する不思議さを備えていた。現に明和の大火は焼けるのも速かったが、その復興、そして以前にも増す繁栄を見せている。

「鳶重」の演出による江戸の文化が花咲き、歌麿の浮世絵の美人画が一世を風靡するのも被災後のこと。

明治二十六年（1893）の小鹿島果が編纂した『日本災異志』に見える災害を、百年ごとに飢饉・大風・早魃・霜雨・洪水・疫病・火災・噴火・地震・津波に分類し、集計したものを見たことがある。

元禄十四年（1701）から寛政十二年（1800）にかけては、火事が205件記録されており、次の享和元年（1801）から明治二年（1869）にかけては402件とあった。

慶長六年（1601）から元禄十三年（1700）までが170件とあるから、江戸時代は「無事泰平」の世が続き、人口が増えてくると火災はそれに応じて増えたようだ。

まして江戸の人口は、十八世紀の初めに町方人口約50万人（地主・家持など上層町人は、うち36パーセント）、これに武家・神官・僧侶などの人口を加えると100万台に達していた。

町人の64パーセントは裏店（俗に九尺二間の裏長屋）に住んでおり、一住まい平均3・75坪（七畳半）の棟割長屋で、熊さん八さんの生活を送っていた。多くは職人を生業としており、商人に比べると概して低収入であった。

職人を代表する「三職」と言われたのが、大工・左官、仕事師（鳶）で、いずれも火事のあとに、大活躍をした。

だが、生活レベルが高いと言われた彼らでも、その年収は衣食住の支出を引けば、年間わずかなお金しか残らなかった。夫婦に子供一人の家庭ならばまだしも、家族がそれ以上に多くなると、おそらく家計は赤字になったかと思われる。

比較的収入のよい「三職」でさえこのありさまであった。

火事が起きれば、復興の仕事が発生する。大火であれば、労銀も上がったろう。

けれども職人たちの収入は常に不安定であり、稼ぎさえすれば生活に困ることはないとの自負があるものの、一方では金を残し、溜たいと思っても、その余裕がないのが実情であった。

「宵越しの金を持たぬ」

という威勢のいい「江戸っ子」の啖呵も、火事を「江戸の華」とするその心情も、ある種のやせ我慢、負け惜しみととれなくもなかった。

ついでながら、もう一つの華＝喧嘩だが、これはコミュニケーション不足——言葉が通じないことによって起きたものである。

そもそも江戸は中世において、関東の片田舎であり、小田原のように開けてはいなかった。

アメリカの西部劇よろしく、新興都市が開発されるに及び、土木工事に従事する人々が、諸国から江戸に流れ込んできた。

お互い相手の言葉＝方言が理解できず、喧嘩となる。心のいこいを家族に求めたくとも、江戸は男性の単身赴任先。危なくて、女性を迎え入れることができない。

それゆえ、遊廓の吉原が元和三年（1617）に早くも幕府公認で誕生している。

やがて治安も安定し、ようやく女性も安心して住むことができるようになり、裏店にも夫婦連れの姿が見られるようになった。子供も生まれて、家族が暮らすことのできる都市となる。

この子供の両親が、ともに江戸生まれであって、はじめて子供は「江戸っ子」と呼ばれた。

——江戸っ子の誕生は、多くの人々が思う以上に遅かったのである。

筆者は蔦屋重三郎のもとに居候をしていて、その死後、『東海道中膝栗毛』を発表してベストセラーとなった、十返舎一九の活躍していた頃が、ようやく江戸っ子誕生と重なると考えてきた。

江戸落語の寄席が、成り立つようになったのも同じ頃。江戸弁が理解できなければ、寄席ブームはそもそもあり得ない。

江戸の「御府内」＝江戸の範囲も、火事ごとに広がり、文政元年（1818）になってようやく「朱引」として、範囲が示された。品川大木戸、四谷大木戸、板橋・千住・本所・深川の以内を、江戸御府内ということになった。